

意見書

有限会社ファーム菅久 菅原 紋子

昨年からの米価下落を受け、今後農地を手放す人が更に多くなると考えている。今現在でさえ、親世代ができなくなり次の子供世代に引き継がれていく中で、自分の農地がわからない、農地はいらない、農業はしないできない、という世代になっており、農地を手放す人が多い。国では昨年「食料・農業・農村基本計画」が見直され、将来にわたって国民生活に不可欠な食料を安定的に供給し、食料自給率の向上と食料安全保障を確立するという基本的な方針が示したが、簡単に農地を手放す人が増え、少子高齢化人手不足で地域の担い手に負担がかかり、これ以上農地を増やすことに限界を感じている。だからこそ基盤整備や ICT といった技術の普及も必要だと考えているが、機械があっても人がいなければ何もできないので、人手の問題をどうするか重要課題だと感じている。

また、農地が増えれば、何を生産していけばいいのか非常に難しい。米が余っているから生産調整だとなれば、今ある機械設備で何が生産できるか、高収益作物への転換となれば、機械も設備も変えることになり、加えて土づくりから始まり、商品として出荷できるまでに時間はかかるし設備投資が必要となる。時間をかけて設備投資をしてまで、別のモノを生産することはハードルが高いと感じている。それに加え、米価が下落し、原油や資材等の価格が年々上がっている状況で、コストを下げて生産しようと努力しても経営が難しくなってくる。このままだと米を作る人たちがいなくなり、耕作放棄地が増え、食料自給率も下がるのではという危機感もある。最近では、今まで農地だったところが工業用用地に埋め立てられたり、太陽光パネルが設置されたりと、農地ではなくなっているところも多くなった。

先日農業新聞に消費者の方からの声で食の大切さについてのコメントが載っていた。「日本は食糧自給率が低いと輸入に頼らざるを得ない状況だ。もし海外で何か起きて日本に食料が入ってこなくなったらどうなるのかと思ったら、大変不安だ。今は世の中に物がありすぎる時代になった。なんでもすぐ買って与えてしまうことが、どの家庭でも常に起きている。物がなくなった時のこと、物の大切さ、食の大切さを大人一人一人が子供に教えていくべきだ。」本当にこの通りだと思う。

私は、実家であるファーム菅久に就農して 11 年が経った。まだまだ分からないことがたくさんあるが、後継者として何ができるか自分は何をしたいのか、この職業を生涯の仕事として楽しみながら仕事をしていきたいと思い考えながら仕事をしている。しかしながら令和 3 年度産米は 30kg あたり 4,000 円台で、現時点で明るく楽しい未来を創造することは難しい。私が住んでいる地域には、親元就農している同じくらいの年代の人たちはいるが、この先 10 年後 20 年後には今よりもっと農業で生活していける、若い人たちが憧れるような職業になってほしい。